小学生における育児不全に関する意識調査 (1)

○守谷賢二¹・飯島博之²・吉森丹衣子³・小野 淳⁴・斎藤富由起⁴
 (1)文教大学大学院・2練馬区総合教育センター・3法政大学大学院・4千里金蘭大学)
 キーワード: 小学生, 低学年, 育児不全

Survey attitudes toward child-rearing inadequacy in elementary school children (1)

Kenji Moriya¹, Hiroyuki Iijima², Taeko Yoshimori³, Atsushi Ono⁴, Fuyuki Saito⁴

(¹Graduate School of Bunkyo Univ., ²Nerima general educational center, ²Graduate School of Hosei Univ., ⁴Senrikinran Univ)

Key words: elementary school children, early elementary school years, child-rearing inadequacy

目 的

近年, 児童虐待は増加の一途をたどっており, 厚生労働省の発表によれば, 平成 20 年度に児童相談所において児童虐待の相談に応じた件数は, 42,662 件であった。平成 2 年度の 1101 件と比べると約 40 倍の数になっており, こうした状況を受けて, 国もさまざまな取り組みを行っている。

児童虐待の背景要因については, 様々な要因が挙げられており, 2005 年に東京都の行った調査によれば, 「ひとり親家庭」, 「経済的困難」, 「親族, 近隣などからの孤立」, 「夫婦間不和」, 「育児疲れ」などが, 虐待をする側の家庭状況の特徴として上位に挙げられていることが明らかになっている。また, これらの要因は単独ではなく, いくつかの状況を併せ持っていることも報告されている。

以上のように, 虐待については急務な対応が必要であり, 予防的な視点からの対応も重要である。予防という観点から見た場合, 虐待が生じる以前には, さまざまな家庭的な変化や親子関係の変化が起こっていると考えられる。その 1 つの要因として「育児不全」が挙げられよう。つまり, 虐待までは行かないものの, 家庭の中でうまく機能していない部分が生じていると考えられる。そこで, 本研究では, 小学生の低学年 (1 年生～3 年生) を対象に生活アンケートを通して, その育児不全の実態を把握することを目的とする。

方 法

調査対象

関東郊外の小学 1 年生 (男子 38 名, 女子 31 名), 2 年生 (男子 55 名, 女子 29 名, 不明 2 名), 3 年生 (男子 36 名, 女子 35 名) を対象に生活アンケートを実施した。

調査方法

担任の先生を通してアンケートを配布してもらい, それぞれの授業の時間に回答してもらった。低学年であったため, 回答については, 担任の先生に指示を出してもらいながら回答を求めた。

調査内容

全部で 11 個の内容について質問を行った。本研究では, このうち育児不全に関連すると思われる質問についてのみ検討を行う。具体的には, 「1 週間のうち朝食を食べない日」, 「朝食を作る人」, 「悲しいことや困ったことを保護者に話をするか」, 「保護者から叱られることがあるか」, 「叱られる場合その方法」, 「叱られない場合, その理由」についてそれぞれいくつかの選択肢の中から複数回答により回答を求めた。

結 果

1 週間の朝食の回数について, 「毎日食べる」, 「1, 2 日食

べない」, 「3～5 日食べない」, 「6～7 日食べない」の中から回答を求めた結果, 「1, 2 日食べない」という児童が 2% あり, 95% の児童が毎日食べていると回答した。残りの 3% は未回答であった。また, 誰が作っているかについては, 「買ってきたもの」と回答した児童が 1 名 (0.4%), 「自分」と回答した児童が 12 名 (5%) 見られた。

次に, 「悲しいことや困ったことを保護者に話をするか」について質問をした結果, 父親については, 1 年生 43%, 2 年生 35%, 3 年生 47% であり, 40% 前後の児童が父親に話をするという回答した。母親については, 1 年生 76%, 2 年生 76%, 3 年生 64% で, 70% 前後の児童が母親に悲しいことや困ったことについて話をすることが明らかになった。

「保護者から叱られることがあるか」について質問をした結果, 1 年生 78%, 2 年生 90%, 3 年生 86% であった。「叱られる方法」について, 8 つの方法から複数回答により回答を求めた結果, 「やさしく叱られる」が 14%, 「目を見て厳しく叱られる」が 50%, 「兄弟と比べて叱られる」が 32%, 「おまえなんかいい方がよいと叱れる」が 16%, 「頭や手をぶたれる」が 47%, 「足や体を足で蹴られる」が 24%, 「ご飯をもらえない」が 3%, 「話してもらえない」が 27% であった。また, 「叱られない」と回答した児童 (34 名; 20%) にその理由を 5 つの選択肢の中から複数回答により回答を求めた結果, 「叱られるようなことはしない」が 65%, 「叱られないように気をつけている」が 41%, 「お父さんやお母さんが忙しくて話す時間がない」が 18%, 「自分を怖がっている」が 15%, 「お父さんやお母さんは自分とあまり話そうとしない」が 12% であった。

考 察

小学生低学年を対象に生活アンケートを実施し, 育児不全に関する項目について検討を行った結果, 朝食については, 低学年にもかかわらず, 自分で作っていたり, 買ってきたものと回答する生徒が約 5% いることが明らかになった。困ったことや悲しいことについては, 父親よりも母親に話す傾向が高かったが, 今回得られた数字は, 高いのか低いのかは更なる検討が必要であろう。叱られる方法については, 不適切な叱られ方をしている児童がかなりの高い割合で存在していることが明らかになった。この点は非常に注目すべき点であり, 今後詳細な検討が必要であろう。

以上のように, 生活アンケートから育児不全について検討を行ったが, 今回の研究だけでは, 「不適切さの程度」については明らかにすることはできなかった。今後はこうした点を含めた検討が必要であろう。